
蕎麦屋の兄妹

関村俊介

登場人物

兄 妹 杉本 金子 小林 後藤 森田 石川 井上

広い部屋。テーブルがあつて、椅子がいくつか。

兄と妹が座っている。

兄は携帯をいじっている。

妹は目をつぶって、何やら考えている様子。

妹 あー。うどん。美味しい。

兄は妹をちらりと見る。

妹 あー。美味しい。うどん。

兄 どうした？

妹 なにが？

兄 食べてもないうどんを美味しがってたけど。

妹 食べたよ。

兄 食べてないだろ。

妹 頭の中で食べたんだよ。想像。

兄　なんだよそれ。

妹　あー。美味しいっ、うどん。

兄　やめろよ。なんか怖いから。

妹　兄ちゃんも食べてみればいいよ。

兄　は？

妹　食べてみなよ、美味しいから。

兄　いやいや。

妹　想像して。丼があるね。

兄　う、うん。

兄は目を閉じた。

妹　湯気が出てるね。中を見ると、とろーり、と。

兄　とろりとしてるの？

妹　してるね。卵が。

兄　そんなのあるか？…あるか。

妹　半熟でさ。

兄 うん。

妹 トンカツが包まれてるわけ。

兄 なんだその創作うどんは。

妹 違う違う。これはカツ丼。

兄 うどんじゃねえのかよ。

妹 セットだよ。カツ丼セット。セットにはミニうどんがついております。

兄 あ、そう。

妹 食べてみて。

兄 …美味い。

妹 でしょ。うどん、美味しいんだよ。

兄 あ、ごめん、俺、今、カツ丼くっちゃった。

妹 はー。信じられない。うどんの話をしてたのに。

兄 お前がカツ丼セットにしたからだろう。

妹 食べて。

兄 なに？

妹 ミニうどんも食べて。

兄 もういいよ。

妹 じゃあちようだい。

兄 え？

妹 食べないんだったら私にちようだい、ミニうどん。

兄 勝手にしろよ。

妹はありもしないミニうどんを奪い、目を閉じた。

妹 あー。うどん。食べたい。

兄 どういうことだよ、今食べただろ。

妹 現実に食べたいってことだよ。

兄 食べればいいだろう。

妹 だってさあ。

ピンポンと鳴る。

妹 ああ、来ちゃった。

兄が玄関のほうへ行く。

妹はまた目を閉じて。

妹 あー。うどん。美味しい。

兄がスギモトを連れて戻ってくる。

スギモトは透明のパックに入った生蕎麦を持っている。

杉本 今日のは、美味しいですよ。

兄 なんか違うんですか？

杉本 違うないけど、自信あるんです。

兄 へえ。

杉本 はい。どうぞ。

と、スギモトは蕎麦の入ったパックをテーブルに置いた。

妹 ありがとうございます。

杉本 2分ね。茹でるの。

妹 はい。

杉本 これ毎日言ってるか。

妹 そうですね。…あの。

杉本 なんですか？

妹 これは、うどんですか？

杉本 いいえ、蕎麦です。なんですか？英語を直訳したみたいな会話でしたけど。

妹 今日も、蕎麦ですか。

杉本 蕎麦屋で修行してますからね。

妹 なんで私たち、毎日、食べてるんですかね。スギモトさんの蕎麦。

杉本 え？

妹 え？って、え？

杉本 え？

兄 え？

杉本 判定してるんですよね？

兄 どういうことですか？

杉本 採点してるんでしょ？2人が。

兄 なんで？

杉本 だって。え？

兄 俺、蕎麦の味とかよくわかりませんし。

杉本 蕎麦屋の息子なのに？

兄 継いでないですからね。

杉本 じゃあ、採点して師匠に報告とか。

妹 してないです。親と、普段会わないですし。

杉本 え？じゃあ、これ（生蕎麦）はなんのために持ってきてるんですか？

兄 知らないですよ。スギモトさんが毎日持って来てるんだから。

杉本 知らないのに、なんで食べちゃうの！

兄 いやいや、あったら食べるでしょ。

妹 食べなきゃいけないのかな、って思うもんね。もったいないし。

杉本 えー。嘘だよー。半年くらい毎日持ってきてますよ？

兄 そうですね。

杉本 えー。なんで持って来てたんだろう。

兄 親父に言われたんじゃないんですか？

杉本 師匠に言われたんですかね。どうですかね。わかんないです。

兄 でも、それしか考えられませんかね。

杉本 えー？あれ？なんでだ？半年前。何があった？あ、大雪降った日ありましたよね。

妹 ありましたね。

杉本 ね。凄い積もって。あの日、出前大変だったなあ。

兄 でしょうねえ。

杉本 はい。…これ関係ないか。

兄 関係ないのかよ。

杉本 なんでだったかなあ。

兄 確認したほうがいいんじゃないですかね。

杉本 そうですね。

妹 ちゃんと確認したほうがいいですよ、本当。毎日蕎麦持って来るのも大変ですし。私たちもね、毎日

食べるの、なんていうか、ね。

杉本 明日、師匠に確認してみます。

兄 うん、そうしてください。

杉本 はい。じゃあ、また。

スギモト 帰ろうとして。

杉本 あ、でも、今日のは食べてくださいね。自信作だし。
妹 えー。

杉本 なになにに？え？この蕎麦、不味いですか？

兄 そんなことない、美味しい美味い。食べます食べます。

杉本 本当ですか？そんなこと言って、毎日捨ててるんじゃないですか？

兄 食べてます、毎日食べてますし、今日も絶対食べます。

杉本 ならいいですけど。

兄 じゃ、また明日。

とかなんとか言いながら、兄はスギモトを連れて玄関のほうへ。

妹 結局、蕎麦か。

兄が戻ってくる。

兄 お前さあ。

妹 だって、うどん食べたかったんだもん。

兄 だからってさあ。

妹 あーあ。これ（生蕎麦）、なんとかしてうどんにならないかなあ。

兄 ならねえよ。

妹 これ、二八蕎麦だよね。

兄 そうだね。

妹 ていうことは、八割はそば粉で、二割は小麦粉だよね。

兄 そうなるね。

妹 つまり、二割はうどんなんだよなあ。

兄 それはどうだろう。

妹 うどんでしょ。どうにかうどんだけにならないかなあ。

兄 ならないだろうね。

妹 あー。うどん、食べたい。

兄 もう、茹でるぞ。

と、兄はキッチンのほうへ、生蕎麦を持って、行く。

妹 やっぱり、想像力でカバーするしかないか。

妹は目をつぶって。

妹 あー。うどん。美味しい。

テーマ曲がかかる。

ゆつくりと転換の明かりになって（すげえ派手でもいいかも）

妹はハケる。

テーブルとかがなくなる。

ビルの屋上。

兄と、カネコ、ゴトウ、コバヤシがバレーボールで遊んでいる。

金子 いまどきさ。

後藤 いまどき、何？

金子 いまどき、昼休みに、会社の屋上でバレーボールやってるのなんて、うちらぐらいだよ。

小林 そうかなあ。

金子 そうでしょ。こんなの昭和の光景だよ。見ないよ、なかなか。見たことある？

小林 ないけどさ。

後藤 ないけど、何？

小林 他の会社の昼休みの様子を見るチャンスがないからさ。

後藤 あー。

小林 わかんないよね。もしかしたら、どこの会社でもやってるかもしれないよね。

後藤 そうだね。

金子 やってないでしょ。うちらだけでしょ。

小林 カネコって、そういうところあるよね。

金子 え？

小林 自分は他の人とは違う、みたいな。自分は普通じゃないと思いたいみたいな。

金子 そんなことないよ。

小林 あるよ。

カネコはコバヤシにスパイク。

出来れば、ボールが顔面に当たるといい。当たらないと思うけど。

小林 えー。簡単にキレたな。

後藤 はい、コバヤシ、ミス1。

小林 えー！今はカネコのミスでしょ。

金子 そっちにボールいったじゃん。

小林 そんなのあり？

コバヤシは最初から、カネコに向かってスパイク。

もちろんカネコは受けない。

後藤 はい、コバヤシ、ミス2。

小林 なんでだよ。おかしいでしょ。

金子 早く拾ってきなよ。

小林 えー？

金子 今日、罰ゲーム、何にしようか。

後藤 だいたいのはやっちゃったからね。

金子 何がいいかな。案、出してよ。ゴトウ。

後藤 うーん。思いつかないなあ。

金子 ムシャノコウジは？なんかない？

兄 ちよつと思いつかないね。

金子 そう。

小林 あ！あれは？切腹。

後藤 ミス2のくせに大胆な提案をするね。

小林 どうか？

金子 死んじやうから。

小林 や、もちろん、死なない程度によ？

金子 だとしても、知らない人がみたら、ただの自殺未遂だからね。

兄がミスする。

後藤 はい、ムシャノコウジ、ミス38。

試し読みしていただけるのはここまでです。

この続きは商品をご購入の上ご覧下さい。

蕎麦屋の兄妹（おためしサンプル）

2014年9月28日 初版発行

著 者 関村俊介 © 2014年

発行者 石村寛之

発行所 有限会社レトロインク

〒181-0001 東京都三鷹市井の頭4-26-7

電話 0422-49-2903
